

令和 6 年 9 月 23 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12663

研究課題名（和文）観光拠点における景観配慮型駐輪環境のあり方に関する研究—京都市の新たな課題から—

研究課題名（英文）Research on landscape-friendly bicycle parking environments at tourist bases - New challenges for Kyoto City

研究代表者

藤本 英子 (FUJIMOTO, Hideko)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：60336724

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：（1）観光施設における景観配慮型駐輪場ガイドライン（京都市での事例から）冊子の作成 / 「景観に配慮した駐輪環境のあり方」を明確にし、設置のためのガイドラインを作成。観光拠点においてどのような設計が景観に配慮された駐輪環境となるのかを示した。
 （2）京都市内の寺社仏閣における現状調査とその評価を発信 / 「世界トップレベルの自転車共存都市」「新景観政策」といった市の基本理念に基づくあり方と、研究者による評価を発信した。
 （3）自転車のある景観を形成する事例調査 / 欧州及び国内でのサイクルステーションの現状調査から優れた駐輪環境整備の事例を把握。メーカーの製品事例を用いて提案。景観配慮型の駐輪場を整備した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全国でコロナ後にインバウンドで観光地は多くの来訪者を迎えている。その中で自転車により観光を行う層が存在する。京都市は中でも多くの寺社仏閣が観光対象として、自転車での観光者を受け入れている。現状は駐車場の一部に駐輪施設があるなど、明確な景観配慮について検討されることがなかった。今回は、景観行政先進地域でもあり自転車利用環境整備が日本の中でもトップクラスに進む京都市を事例に、「観光施設における景観配慮型駐輪場ガイドライン」を作成することで、全国の観光拠点での駐輪施設整備にも参考になる。また、ケースに応じた提案では、メーカーの参考製品を具体的に示すことで、よりリアリティをもつ提案となっている。

研究成果の概要（英文）：(1)Creation of a booklet of guidelines for landscape-friendly bicycle parking at tourist facilities (based on examples in Kyoto City)/Clarified the "ideal landscape-friendly bicycle parking environment" and created guidelines for installation.This paper showed what kind of design would create a bicycle parking environment that takes the landscape into consideration at a tourist base.
 (2)A survey of the current status of temples and shrines in Kyoto City and its evaluation were disseminated/We disseminated the city's approach based on its basic philosophy of "a world-class bicycle coexistence city" and "new landscape policy," as well as an evaluation by researchers.
 (3)Case study on creating landscapes with bicycles/Understanding examples of excellent bicycle parking environment development from a survey of the current state of cycle stations in Europe and Japan. Proposal using manufacturer's product examples. A landscape-friendly bicycle parking lot has been created.

研究分野：景観デザイン

キーワード：駐輪場 景観 自転車 デザイン 自転車 観光拠点 ナショナルサイクルルート 京都

1. 研究開始当初の背景

(1) 京都市における自転車政策

京都市は「世界トップレベルの自転車共存都市」を目指し自転車環境整備を推進してきた、その背景には、京都市の自転車分担率が23.4%（大阪市27.8%）と全国2位がある。

平成12年に策定された自転車総合計画は22年に改定し、主に放置自転車対策に取り組んできた。まず大型の公共自転車駐車場の整備に取り組むとともに、鉄道、バス事業者や民間の事業者による整備、路上の活用による整備を進め、施設への付置義務を課すなどしてその効果を高めていった。

その結果、市内の放置自転車は平成19年からの7年間で20分の1にまで減少するなど、その効果を上げてきた。その成果を受けて、「自転車対策」から「自転車政策」に大きく舵を切り平成26年度を「自転車政策元年」と位置づけ、「世界トップレベルの自転車共存都市」を目指すことになった。平成27年「京都新自転車計画」を策定し、目標への総合的な進め方を提示した。そのキーワードが自転車の「みえる化」であり、①自転車走行環境の「みえる化」、②ルール・マナーの「みえる化」、③自転車駐輪環境の「みえる化」、④自転車観光の「みえる化」、⑤自転車関連施策の「みえる化」、と5つの方向性を示している。

(2) 京都市における景観政策

京都市は現在、景観政策を「時を超え光り輝く京都の景観づくり」をテーマに、全国トップクラスの景観整備を行なっている。中心部は東、西、北の三方を山々に囲まれた盆地形で、山からの見下ろし景観を重視するとともに、街の中心部から山を見上げた時の眺望景観についても、大切にしている。

現在は、平成19年9月からの新たな景観政策で運営されている。

この基本方針に基づき、「京の景観ガイドライン／建築デザイン編」には、「駐車場等の修景」が示されていた。

2. 研究の目的

(1) 京都市の観光拠点における駐輪政策に対して

これまででも、京都市では景観に配慮した駐輪場を設置してきた。

JR京都駅前では、地下を活用した大規模駐輪場の整備で地上の景観を守り、まちなかの駐輪場（富小路六角自転車駐車場）などでは、周辺の町並み景観に配慮した外観を持つデザインで整備を進めた。それでも不足する中心部のニーズに応え、道路占用による路上自転車等駐輪場の整備が進められ、御池通まちかど駐輪場として道路景観に馴染むデザインが工夫された。

しかし、観光拠点においては、単に駐車場内施設として設置されることが標準で、自転車利用者への誘導も含めた、景観配慮型の駐輪施設は広がっていないため、その設置に向けたガイドラインを提案することを目的とする。

平成27年「京都新自転車計画」における、③自転車駐輪環境の「みえる化」政策への支援となることを目指す。

(2) 観光拠点における景観に配慮された駐輪場設置について

京都市でのガイドラインは、全国の観光拠点などでの、環境配慮型駐輪施設づくりへの提案ともなる。広い活用を望むところである。

3. 研究の方法

(1) 京都市の観光拠点における現状調査から

今回の現状調査では、京都市の中心的観光拠点である「神社仏閣」21箇所の現状調査から入った。

市の「地域の特性に応じた、新たな景観政策」では、地域の応じた景観配慮のための、細かい地域の区分がされている。景観法に基づく「景観地区」を、大きく分けて6つの「美観地区」と2つの「美観形成地区」に指定し、「建造物修景地区」も4つの地区に細分化している。この地区ごとに、共通と地区別のデザイン基準が設定されているが、今回調査の寺社仏閣は、いずれかの指定地域に存在し、景観上重要な場所と言える。

(2) 全国及び海外での観光拠点における現状調査から

国内では現在、「自転車活用推進法」に基づくナショナルサイクルルートとして、6つのルートが指定されている。国によりソフトとハード面から自転車観光のルートとしてふさわしいとされているこのルートにおいて、どのような駐輪環境が整備されているのか、4つのルートの調査を行なった。

欧州における観光拠点での駐輪環境調査では、ドナウ川のつながりで整備されているドイツ、オーストリア両国の事例調査を行なった。

4. 研究成果

(1) 観光拠点における駐輪場の基本的な考え方の提案

京都市の観光拠点（寺社仏閣21箇所※）は、その形態を分類すると、A屋外駐輪場、B単独空間施設、C周辺路上、と分類できた。この21箇所について、それぞれの形態分類、利用状況、駐輪場構成要素、駐輪場の周辺状況から、総合評価と現状分析、課題を抽出した。

現状分析では、「視覚的な発見しやすさ」「物理的な入りやすさ」「とめやすさ」「施設としての景観」「利用状況としての景観」の5つの視点で、観察者による5段階の評価を行なった。

これらの事例を把握することにより、周辺の景観を守り、増加する観光目的の自転車に対応した駐輪環境の整備について「景観に配慮した駐輪環境のあり方」を明確にした。

※21箇所 1伏見稻荷大社 2金閣寺 3清水寺 4三十三間堂 5二条城 6平安神宮
7銀閣寺 8永観堂禅林寺 9東寺 10東福寺 11高台寺 12南禅寺 13天龍寺
14建仁寺 15仁和寺 16八坂神社 17大徳寺 18京都御所 19龍安寺
20青蓮院 21上賀茂神社。

(2) 京都市の観光拠点における駐輪場の提案

(1)で行なった調査の結果、分析をもとに、周辺景観に応じた配慮に基づく、駐輪場のあり方を、具体的な駐輪場構成要素の組み合わせで提案を行なった。

調査分析を行なった21箇所の寺社仏閣から、18箇所の事例での周辺環境に応じた景観配慮型の駐輪場を作成するために、どのような構成要素を用いるのがふさわしいのか、具体的な市販品の組み合わせから提案している。この中では「路面表示」「壁面として駐輪場を取り囲む3面」「屋根」の事例提案を行なった。

また、景観配慮型の駐輪場の構成要素として「駐輪ラック」「柵・フェンスなど」「路面」「サ

イン類」についての基本的な考え方を提示している。

これらを取りまとめた「観光拠点における景観配慮型駐輪場ガイドライン～京都市での事例から～」として冊子を作成した。京都市のみならず全国の観光拠点で、景観配慮型の駐輪場設置のガイドラインとしての活用を、望むところである。

(3) 国内及び海外における観光拠点の駐輪場調査結果から

○国指定のナショナルサイクルルートでは「つくば霞ヶ浦りんりんロード」「しまなみ海道サイクリングロード」「富山湾岸サイクリングコース」「太平洋岸自転車道」をまわり、指定の条件でおおむね20km毎に設置されている、それぞれの「サイクルステーション」での駐輪環境を調査した。

サイクルステーションでは、必ずスポーツタイプの自転車用のバイクラックが設置されているが、ママチャリと呼ばれる自転車や、電動アシストタイプの自転車などでは、重さや形状のためそれを利用することなく、バイクラックの足元に駐輪されている事例が多く見られた。

また、駐輪設備の位置は、トイレ付近が多く、利便性には優れている場合が多かった。

サイクルステーションでは、メンテナンス道具や、空気入れの準備が求められているため、ほぼ全施設に準備されていたが、メンテナンス道具では、単に道具があるだけで、施設で対応する専門家が不在の場合がほとんどであった。そのため道具は利用者の専門性が、求められる状況である。ナショナルサイクルルートのサイクルステーションでは、今後設備などのハード整備とともに、専門性を持った人的な充実が求められる。また、ハード整備においても、サイクリングを楽しむ人々の多様性や、電動アシストタイプの自転車の増加に伴い、駐輪場のあり方を見直す必要性を感じた。

○ドナウ川のつながりで整備されているドイツ、オーストリア両国の事例調査では、下記の状況が明らかになった。

<ドイツ>

・ミュンヘン：街中には自転車レーンが標準的に設置され、駐輪施設も簡易なタイプで路上に多く設置されている。放置自転車、シェアタイプの電動キックボードが路上に放置されている状況が多く見られた。

・パッサウ：自転車のレンタルが可能で、石畳の坂道もある街中も自転車が走る。ドナウ川の舟運が発達している拠点として、乗船場にも駐輪施設が設置されている。

<オーストリア>

・シュレゲン：川沿いのレストランなどで、広告付きの無料駐輪設備が多く見られる。川沿いを自転車で旅をしているシニア走者に多く出会った。

・リンツ：修道院や教会はイベント会場としても活用し、どの施設にも必ず簡易な駐輪設備がある。

・イピス：自転車博物館があり、発祥からの自転車と周辺文化の展示を鑑賞できる。

・エンマースドルフ：自転車イベントもあり、広場におけるイベント用の駐輪施設がシンプルでセンス良く活用されている。多くの店舗に簡易な駐輪設備が標準的に設置されている。

・シュピッツ：ドナウ川沿いの自転車専用道の整備が進み、サイン計画も充実し、自転車文化の先進的状況が確認できる。

・チェルシュタイン：古い町並みの石畳観光地では、自転車の走行を禁止し押し歩きだが、小さな駐輪設備が店ごとに見られる。

- ・クルムス：シェアバイクも見られる大きな観光拠点で、バス、自動車、自転車、船の結節点として交通環境が充実している。交差点処理は、ほぼラウンドアバウトで自転車がしやすい。
- ・ウィーン：自転車専用レーンが整備され、自転車利用も進むが、放置自転車、シェアタイプの電動キックボードが路上に放置されている状況がある。

○まとめ

都市では放置自転車問題などがあるが、小分けに設置されているシンプルな駐輪設備は、日本にないタイプが多く見られた。ツーリストへの案内は、ネット上だけではなく、MAPの充実と現場でのサイン計画の成熟が見られた。サイクリストの多くが、アシスト付きの電動自転車を利用し旅を続けていた。高齢者の夫婦や、グループにも多く会い、自然を楽しみながら走り、船に自転車を積み移動するなど、ドナウ川に沿って繰り広げられる、幅広い楽しみ方が見られた。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 藤本英子	4. 巻 82'21
2. 論文標題 「Go Toトラベル」現場から 見えてきた旅のあり方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 芸術工学会誌 Design Research No.82,Mar.21	6. 最初と最後の頁 164-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本英子	4. 巻 1
2. 論文標題 京都の自転車まちづくりと自転車活用推進法からの各地の政策	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 造形 2019	6. 最初と最後の頁 170-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤本英子	4. 巻 36-11
2. 論文標題 京都市内観光拠点に於ける駐輪場景観の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第60回土木計画学研究発表会・講演集	6. 最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤本英子	4. 巻 No.79,Oct.26
2. 論文標題 京都市の観光拠点における駐輪環境の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 芸術工学会誌	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤本英子
2. 発表標題 自転車環境整備による地域魅力づくりに向けて
3. 学会等名 芸術工学会2020秋期大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本英子
2. 発表標題 京都市内観光拠点に於ける駐輪場景観の現状と課題
3. 学会等名 第60回土木計画学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本英子
2. 発表標題 京都市の観光拠点における駐輪環境の現状と課題
3. 学会等名 芸術工学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤本英子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同友館	5. 総ページ数 228
3. 書名 公共空間の景観力	

1. 著者名 藤本英子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同友館	5. 総ページ数 228
3. 書名 公共空間の景観力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------